D 8　新築住宅における家庭内事故について
（住宅間の慣れに対する日常安全計画的研究．その3）

広島工大建築　西川加禰

目的．家庭内で起る事故は非常災害とくらべて余り大きな社会的注目を与えない．しかしながら階段から転落して骨折したものから，柱の角に頭を打った程度のものまで日常の住生活における事故が多いのも事実である．本研究は住いは安全でなければならないと云う前提にたち，家庭内事故がどのように起り，その問題点がどこにあるかを解明し，その対策を考えるためのものである．

方法．住み始めて使い勝手の慣れないうちはとかくトラブルが多いものである。ここでは新築3年未満の不造戸建住宅を対象に家庭内事故の実態を把握するため，アンケートとヒアリングによる調査を行った．調査実施は昭和59年8月，配布数は150件，有効回収数は100件であった．

結果．ケガの経験ありとするのが13%を占めており，このうち8割近くが子供であった．これは小学生以下の子供がいる家族が54%を占め，65才以上の老人同居家族は9%と少なりことから，老人のケガ発生率は表面に出ていない。事故の発生個所は階段が38%と最も多く，次いで浴室が29%，玄関が14%となっている。ケガの状態は転落が37%，転倒37%はさまれたもの16%となっている。ケガの種類は打撲が35%と最も多く，ついでねんざが18%，すり傷17%などが多い。事故の原因となったものは内装仕上材関係が50%と多く，家具，電化製品，遊具，石・砂利などがあげられている．住手側が特に子供に対し配慮している防止策としては，とりわけ階段の場合，手ありをつけかえた，ジュータンを敷いた1人で階段をのぼらせない，滑べりないワックスを使うなどとしている。